# メレク・ヤコヴ　米国出身の元ユダヤ教徒（前半）

私は生まれたときに、メレク・ヤコヴというヘブライ語の名前を与えられました。現在、依然として私は生まれた場所と同じニューヨークの地域に住んでいます。私の家族はそれなりに宗教的でした。私たちは毎週土曜日にハシディック派の集会に行っていましたが、ユダヤ教ハシディック派において要求されていた厳しい戒律の全てを守っていた訳ではありませんでした。ハシディック派とは、一般的に「超正統派」として知られるユダヤ教の一派です。彼らがそう呼ばれているのは、彼らがハラーハー（ユダヤ法）を厳守し、ユダヤ教神秘主義（カバラ）に従っているからです。彼らは時たま道端で見かける、黒いスーツと帽子に身を包み、髭ともみあげを伸ばした奇抜な格好をした人々です。

私たちはそんな風貌ではありませんでした。私の家族は安息日でも料理したり、電気を使っていましたし、私自身、頭にヤムルカ（ふちなし帽）をかぶったりはしませんでした。また、私は非ユダヤ教徒の学生や友人たちに囲まれた世俗的な環境で育ちましたし、長年に渡り、安息日に運転したり、コーシェル食（ユダヤ教の食規律で許された食べ物）でないものを食べたりしていたことに罪悪感を抱いていました。

私は戒律の全てを守ってはいなかったものの、それが神が求めていた生き方だという強い感覚を持っていましたし、戒律を破るごとに神の御前において罪を犯していたのだということを感じていました。私の母は、私が幼少の頃からバアル・シェム・トーブとして知られた有名なラビ・エリエゼルの逸話や、ハッガーダー（タルムードの中のハラーハーではない部分）やトーラーの言い伝えを読み聞かせてくれていました。

それらの言い伝えのすべては同一の倫理的メッセージを持ち、私がユダヤ教徒のコミュニティ、つまりイスラエルを祖国として認識することに役立ちました。言い伝えはいかにユダヤ教徒たちが歴史を通して抑圧され

てきたことを示し、いかに神が最後まで彼らと共にあったかについて語ります。ユダヤ教徒たちが聞かされて育つ物語は、ユダヤ教徒たちがそれを必要とするときには、常に奇跡が彼らを救ったことを示します。ユダヤ教徒たちがその小さな可能性にも関わらず、歴史を通して生き延びてきたことは、それ自体が奇跡であると見なされています。

なぜ大半のユダヤ教徒たちが、イスラエルに関してシオニストの立場を取るのかが知りたければ、ユダヤ教徒たちが幼少の頃からそれらの物語を吹き込まれてきたことを知らなければなりません。シオニストたちが自分たちは何も悪いことはしていないかのように振舞うのはそのためです。ゴイム（非ユダヤ人）たちは皆、ユダヤ教徒への攻撃の機会をうかがっている敵であると見なされ、信用置けないとされます。ユダヤ教徒たちはお互いへの非常に強い結束があり、自分たちを神の「選民」であると見なします。私自身、長年に渡ってそう信じてきました。

私はユダヤ教徒としての強い自覚を持っていましたが、シナゴーグに土曜礼拝に行くことは何よりも嫌でした。少年時代、父親から無理やりシナゴーグに連れて行かれていたのを未だに覚えています。そこは恐ろしく退屈で、皆が黒い帽子と髭という格好の中、外国語で祈りを捧げていたのがとても奇妙に感じられました。それは慣れ親しんだ世界から、突然見知らぬ外国に放り出されたような感覚でした。私はそうあるべきなのだと思ってはいましたが、（私の両親同様、）ハシディック派のライフスタイルを取り入れることはありませんでした。

私が13**歳になったとき、他のユダヤ教徒の少年たち同様、バル・ミツワーという成人式が行われました。また、毎朝テフィリン（ヘブライのお守り）を身に付け始めました。それを身に付けないことは不吉であり**、悪いことが起きるかもしれないから危険であると教えられました。初めてテフィリンを付けなかった日、なんと母の車が盗難被害に会いました。そのことからも、私は長きに渡ってそれを身に付け続けました。

私のバル・ミツワー後しばらくすると、家族はシナゴーグに通うのを止めてしまいました。家族は3**時間半もの礼拝時間に耐えられず、私がバル・ミツワーさえ受けてしまえばもうそれでいいと思ったのです。その後、父は信者たちの一部と愚かな喧嘩になり、あらゆる礼拝に行くのを止めてしまいました。そして、奇妙なことが起こりました。父は彼の友人から、イエスの受け入れを説得されたのです。父がキリスト教徒に改宗しても、母は彼とは離婚しませんでしたが、彼女はそれ以来、そのことに対し無言の憎悪を抱き続けています。**

10代前半だった私は、その頃から何か共感できるものを探し始めました。父の改宗は、私自身の信仰についても疑問を抱かせました。私は、「ユダヤ教とは厳密にはどんなものなのか」「ユダヤ教とは文化なのか、国家なのか、それとも宗教なのか」「それが国家を指すのなら、ユダヤ教徒が2つの国家の市民であることはあり得るのか」「それが宗教であるのなら、なぜ礼拝はヘブライ語で唱えられているのか、またエレツ・イスラエルの礼拝や、『東方の儀式』を行うのか」「それがただの文化であるなら、もし誰かがヘブライ語を使わず、ユダヤ教の慣習を辞めてしまえば、その人物はユダヤ教徒ではなくなってしまうのではないか」といった疑問を抱いていました。

もしも、トーラーの戒律を守るのがユダヤ教徒であるというのなら、なぜモーゼにトーラーが下されるよりも前の時代に生きていたアブラハムが最初のユダヤ教徒だと言われるのでしょうか？　ついでに言えば、トーラーは彼をユダヤ教徒として言及すらしていません。ユダヤという名称は、ヤコブの12子の一人、ユダに因んでいます。ユダヤ教徒は、ソロモンの時代の後に、ユダ王国が設立されるまではユダヤ人とは呼ばれていませんでした。伝統的には、ユダヤ教徒の母を持つ者がユダヤ教徒であると言われています。それゆえ、たとえキリスト教や無神論を実践していても、ユダヤ教徒として見なされるのです。私はどんどんとユダヤ教から離れていきました。そこには従うべき戒律やミツワー（善行）が多すぎました。これらの儀礼の意義とは一体何なのかと私は問い始めました。私にとって、それらのすべては人工的なものでした。

## (後半)

私はアメリカ先住民の文化、そして白人開拓民による土地の略奪に対する彼ら先住民の勇敢さに魅了されていました。アメリカ先住民は開拓民から250以上もの条約を反故にされ、誰も住み着かないような荒地をあてがわれました。アメリカ先住民に起きたことは、パレスチナ人に起きたことと類似します。最初のパレスチナ人は、パレスチナの地に数千年間に渡って住んでいましたが、ユダヤ教徒たちが突如侵略し、先住民だった彼らパレスチナ人たちは難民キャンプでの生活を強いられ、今なおそこで暮らしているのです。私は両親に、パレスチナ人とアメリカ先住民の違いについて聞いてみましたが、「彼らはユダヤ教徒を皆殺しにして、海に放り込みたがっているんだよ」といった答えしか返ってきませんでした。パレスチナ人への理解は、私が一度は賢者と見なしていたユダヤ教徒たちと彼らの指導者たち、そしてラビたちよりも私を上にしたのです。善良なユダヤ教徒であれば、ユダヤ教徒たちの入植のためにパレスチナ人が殺戮され、

**その地から追放されたということを否定することなど出来ません。このような民族浄化を彼らに正当化させるものとは一体何でしょうか。それは、多くのユダヤ教徒たちがホロコーストで殺されたことなのです！　または、バイブルがそこを「我々の」土地であると述べているからでしょうか？そうしたことを正当化する書物は何であれ不道徳であり、神によるものではありません。**

私は高校生のときに哲学に興味を持ち始め、過去の偉大な思想家たちの著書をたくさん読みました。私は哲学書を愛読する良き友人たちと時間を過ごし、彼らとは真実への苦難の道を一緒に歩みました。私に影響を与えた哲学者の一人は、ユダヤ教徒として生まれたスピノザです。スピノザは17世紀のタルムード神学生で、（トーラーの中からはどこにも見受けられない信仰である）来世への信仰などを始め、教えられてきたことの全てに疑問を抱きました。事実、多くの初期ユダヤ教徒たちはそうした信仰（来世への信仰）を持ってはいませんでした。スピノザはその思想により、ユダヤ教徒のコミュニティから追放されました。私は彼の持つバイブルの見解を読むことが好きでした。バイブルは数多くの矛盾と諸問題を抱えており、それを文字通り受け止めることなど出来ないのです。

その後、私自身のユダヤ教へのわずかに残された共感を完全に払拭させた、2冊の重要な本を読みました。最初の本はアブラハム・レオンによる「On the Jewish Question（ユダヤ教徒の疑問について）」です。レオンは第二次大戦時にベルギーで共産主義者の地下組織を結成し、後に拿捕されアウシュヴィッツで死んだ人物です。彼の本は「なぜユダヤ教徒たちは生き長らえてきたのか」という長年存在している疑問に答えました。彼は古代から近代に渡るユダヤ教徒の歴史的報告を挙げ、その生存が奇跡によるものではないことを証明しました。カール・マルクスの言葉を借りると、「ユダヤ教徒たちは、その歴史にも関わらず生き残ったのではなく、その歴史のおかげで生き残ったのである。」まず彼は、エルサレムの破壊前にどれ程のユダヤ教徒が自らの意思でイスラエルを去ったのかについて示します。それから、中世時代の君主や貴族たちにとって、ユダヤ教徒たちが仲介人として貴重な存在であったことを説明します。そして資本蓄積の過程を通し、いかにユダヤ教徒の地位が下降線を辿り、やがて高利貸しによって迫害されるに至ったかを示します。

私に影響を与えた2冊目の本は、リチャード・エリオット・フリードマンによる「Who Wrote the Bible?（邦題：旧約聖書を推理する―本当は誰が書いたか）」です。彼はスピノザの歴史的命題を後継します。この本では、トーラーが実際には4人の手によって書かれたことが証明されます。またフリードマンは、古代イスラエル王国とユダ王国による2つの異なる

バイブルの伝承が存在していたものの、編纂者がそれら2つを組み合わせ、現在私たちの手元にあるバイブルの形になったことを説明しています。

友達と哲学について読むこと以外にも、私たちは多様な政治的運動に参加しました。私たちは共和主義から共産主義まで、あらゆることを実験しました。私はマルクス、レーニン、スターリン、毛沢東、そしてトロツキーの全著作を読みました。私はマルキシズムから、人生に欠けていたものを見出しました。私はすべてに対する答えを見つけ出したと思い込み、自分が他人よりも優れた知能を持っているかのように感じていました。私たちの「哲学団（と私が呼んでいた集まり）」は、自分たちで小さな社交クラブを作りました。私たちは色々な社会運動家によるイベントや抗議集会、ストライキなどに参加しました。

アメリカの左翼団体が取り囲んでいるカルト集団のすべてと出会った後、私たちは皆、真実を拒絶した行いをする彼らに対し、「このような人々のいる国家では革命など起きやしない」と嫌悪感を抱くようになりました。過去の手法に頼るのでは、社会的変化のための闘争に勝つことは出来ないのです。

私は革命のための闘争は諦めましたが、パレスチナ支持団体の幹事として活動するようになりました。私はこの運動に自分の情熱を注ぎ込みました。私たちの団体は非常に小さなもので、主流派から攻撃されたりもしましたが、そのことは私たちに誇りを持たせました。私は世界に対し、すべてのユダヤ教徒たちが悪者ではないことを知って欲しかったのです。私は過去に尊敬していた人々がイスラエルの抑圧政権を支持していることを恥じていました。イスラエルによって発せられる嘘は、ホロコーストの否定に他ならないのです。

私はユダヤ教を棄て、現世こそが人間の目標なのだと見なしていましたが、無神論者になることはありませんでした。しかし、私はすべての諸宗教に対して憎悪し、それらは権力者が人々の行動を監視するための道具に過ぎないと思っていました。アメリカにおいて、科学を否定したり、古い白人的価値観を支持したりするキリスト教原理主義者たちの行いを見ていれば、なぜ私があらゆる宗教に対して懐疑的であったかが分かることでしょう。ユダヤ教徒たちがパレスチナ人に対して行っていることも、そうした考え方に拍車をかけました。頭の片隅ではまだ神を信じ続けていたものの、宗教をなくした私は大きな空虚感にとらわれていました。時には宗教的な人の方が、幸福な人生を送ることが出来ているのではないかと感じていた程でした。

正直に言うと、長年に渡る強い反宗教的感情を持っていたが私が、何をきっかけにイスラームに興味を持ち始めたのか覚えていません。子供のとき、母がイスラームについて、ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）が私たちと同じ神を崇拝し、ユダヤ人とアラブ人がアブラハムを通して関係があることを話していたのは覚えています。それゆえ、ある意味ではイスラームのことを、神を崇拝するもう一つの宗教として認めていたと言えるかもしれません。また、（ハシディック派の）従兄弟が私に、「もしユダヤ教徒がユダヤ教徒としての人生を棄て、ムスリムのように生きたのであれば、彼は罪を犯すことはなくなるだろう」と語っていた記憶があります。過去を思い返してみて、そのような言葉を耳にしていたことに自分自身驚いています。

9・11事件が起きたとき、ニュースによる反イスラーム的プロパガンダが急増しました。私は最初から、それらすべてが嘘であることが分かっていました。なぜなら、メディアはそれを支配する人々の利権を保護するものという視点を既に持っていたからです。イスラームに対する最も好戦的な人々がキリスト教原理主義者たちだということに気付いた私は、イスラームにより興味を抱くようになりました。私は活動家としての時期に学んだことについて、神に感謝しなければなりません。社会とメディアについての知識なくしては、テレビでイスラームについて見聞きしたゴミを全て信じ切ってしまったことでしょうから。

ある日、誰かがバイブルにおける科学的事実について話すのを聞いた私は、クルアーンにもそのような科学的事実があるのかどうか知りたいと思いました。インターネットで検索すると、多くの驚異的な事実を見つけました。それからは、イスラームの様々な側面に関する記事を読むことに多くの時間を費やすようになりました。私はクルアーンが一貫して論理的であることに驚きました。クルアーンを読み進め、その倫理的教えをバイブルのそれと比較し、いかにクルアーンの方がより優れているかについて理解するようになりました。また、クルアーンはバイブルのように退屈ではなく、楽しんで読むことが出来ました。5ヶ月に渡る集中的な勉強を経て、私はシャハーダ（改宗のための信仰宣言）をし、公式にムスリムになりました。

私の過去の宗教と異なり、イスラームはそのすべてが理にかないました。礼拝やラマダーンの断食などの実践もより良く理解出来るようになりました。私は様々な戒律を従うことにおいて、イスラームはユダヤ教のようなものだろうと思い込んでいましたが、それは間違いでした。私の自分自身の世界への理解も、イスラームの教えと調和しました。それは、すべての諸宗教は同一であったものの、人によって時代と共に腐敗させられ

た、というものです。神は、ユダヤ教やキリスト教という名前をつくり、人類にご自分を崇拝させるようにしたのではありません。神は人類にイスラームを教えたのです。それはつまり、彼のみに服従するということです。それは至極明白かつ単純なことです。